

言語文化への関心を高める授業づくり

— 表現に注目して古典の現代語訳を読み比べる活動を通して —

大島 美幸¹

グローバル化の進展の中で、国際社会への理解とともに、我が国の言語文化への理解を深め、その担い手としての自覚をもつことが求められている。一方で、言語文化を学ぶ国語科においては、従来の授業形式について課題が指摘されている。そこで本研究では、言語文化に対する生徒の関心を高めるために、古典分野の授業において多様な現代語訳を読み比べる言語活動を実践し、その有効性を検証した。

はじめに

「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」(以下、「新学習指導要領」という)では、国語科の目標として「我が国の言語文化の担い手としての自覚」をもつことが掲げられ、共通必修科目「言語文化」が新設された(以下、科目名は「」を付けることで用語と区別する)。これは、「高等学校学習指導要領(平成21年告示)」で〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設けられたことに引き続き、言語文化に関する教育が重視されていることの表れである。

後述のとおり本研究では、言語文化とは古典(古文・漢文)と現代とのつながりを重視したものであると考える。しかし、平成27年度の学習指導要領実施状況調査では「古文が好きだ」に対する否定的な回答は61.8%、漢文では61.9%であった(国立教育政策研究所 2015a p. 2)。同調査における、国語40.5%(同 2015a p. 10)、数学50.5%(同 2015b)、英語47.9%(同 2015c)と比べると、古典に対する否定的な回答の割合は高いといえる。この問題の背景には、『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説国語編』(以下、『解説』という)で示されている「教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている」(文部科学省 2018 p. 6)という授業形式の課題があると考えられる。

こうした現状から、生徒の言語文化に対する関心を高めるためには、特に古典分野の授業において更なる言語活動の充実が求められていると考え、本研究の目的を次のように設定した。

研究の目的

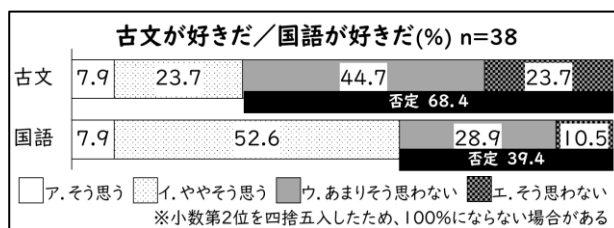
本研究の目的は、古典分野の授業改善に資するために、生徒の言語文化への関心を高めるための言語活動を実践し、その有効性を検証することである。

研究の内容

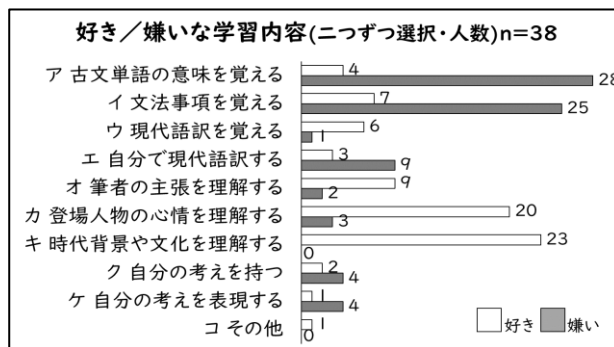
1 研究の背景

(1) 所属校の現状

所属校の学校目標の一つは「確かな学力の向上を図り、次世代を担う人材を育成する」ことである。その実現に向けて、令和2年度からの4年間の目標に「組織的な授業改善」や「生徒の主体的な活動の活性化」等が設定された。教科・科目の学習において、生徒が主体性を発揮するためには、前提として生徒がその教科・科目に関心をもつことが必要であると考えられる。しかし、「古典B」の授業において生徒の現状を把握するために行った事前質問紙調査では、「古文が好きだ」という質問に対する否定的な回答は68.4%であった(第1図)。これは前述の学習指導要領実施状況調査と同様の高い割合であり、言語文化に対する関心を高めるための言語活動の実践は、所属校においても必要である。なお、質問紙調査では後述の検証授業に合わせて、漢文を除いた古文についてのみ質問した。



第1図 古文・国語が好きかどうかについて



第2図 古文の学習内容の好き・嫌いについて

古文について、好きな学習内容・嫌いな学習内容を質問したところ、「ア 古文単語の意味を覚える」、

1 神奈川県立湘南台高等学校
研究分野(授業改善推進研究 国語)

「イ 文法事項を覚える」に対して「嫌い」と回答した生徒が多かった(第2図)。従来の授業では、大学入試等を意識し、古文単語や文法事項を覚えて現代語訳を作成することが中心になる傾向があった。こうした授業形式が古典に対して否定的な生徒を増やす一因であると考えられる。これを改善するに当たっては、「好き」と回答した生徒が多い「カ 登場人物の心情を理解する」、「キ 時代背景や文化を理解する」を授業に取り入れることが重要になると考えられる。

(2) 言語文化の定義と現代語訳

言語文化について、『解説』は次のように定義している(※下線は、筆者)。

我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり、文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能など (文部科学省 2018 p. 24)

また、科目「言語文化」は「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める」ための科目であると示されている(文部科学省 2018 p. 109)。

以上を踏まえて、本研究では「言語文化とは、古典と現代とのつながりを重視したものである」と捉え、古典作品が現代に受け継がれる中で重要な役割を担ってきた現代語訳を活用することとした。現代語訳の中でも特に、意識を中心に活用した。意識の方が逐語訳よりも、登場人物の心情や時代背景・文化について分かりやすく表現されていることが多く、生徒の関心を高めることにつながると考えたためである。

逐語訳＝原文の一語一語を忠実に解釈・翻訳すること。また、そのような翻訳・解釈。
意識＝原文の一語一語にとらわれずに、全体の意味をくみ取って訳すこと。また、訳したもの。
(小学館『精選版日本国語大辞典』より)

2 研究の構想と仮説

(1) 先行研究

現代語訳(特に意識)を活用した言語活動を設定するに当たって、本研究では読み比べという手法に注目した。読み比べ(比較)については、思考力を育成する学習活動として有効であることが確認されている(澤田 2017)。また、現代語訳を活用した読み比べについては、複数の作家の現代語訳を読み比べて作品をより深く味わったり(石原 2011)、現代語訳と原文とを読み比べて文章表現や言葉について理解を深めたり(井内 2019)できることが示されている。さらに、中学校において、古典と昔話との読み比べによって古典への関心を高めることができると示されている(中村 2011)。

以上のことから、読み比べは言語文化への関心を高めることにも有用ではないかと考え、現代語訳(特に意

訳)を読み比べる言語活動を設定することにした。

(2) 期待する効果

本研究の言語活動によって、言語文化への関心を高めることにつながると期待する効果は次の2点である。

ア 古典に対する抵抗感の減少

前述のとおり、古典に対して否定的な生徒は多く、その要因の一つに「言語抵抗」が考えられる。「言語抵抗」とは、現代語と古典語との相違・相同によって学習者に生じる「文章の正確な理解が阻害されている心理的状況」(浅田 1995)である。こうした抵抗感は、複数の現代語訳によって文章の内容理解を補助することで軽減できる。このことが言語文化への関心をもつための第一歩につながると考えられる。

イ 古典の解釈の多様性への気付き

生徒からは「古典は暗記科目」といった声を聞くことがあるが、そう思わせる要因は知識重視の従来の授業形式にあると考える。複数の現代語訳の読み比べを通して、生徒が古典の解釈の多様性に気付くことを期待できる。原文がもつ豊かな意味を、記者や自分はどう感じ、どう表現するのかという視点で古典と向き合うことができれば、古典が現代につながる言語文化であることを生徒が認識でき、言語文化に対する関心を高めることができると考えられる。

(3) 研究の仮説

以上を踏まえて、次のように仮説を立てた。

古典の多様な現代語訳を読み比べる言語活動は、生徒の言語文化への関心を高めることに効果的である。

(4) 仮説検証の手立て

前述の言語活動を取り入れた検証授業を考案・実践し、次の方法でデータを収集した。

ア 質問紙調査、ワークシート

検証授業クラスの生徒を対象に実施した授業前・後の質問紙調査、及び、授業初回と最終回に記入させたワークシート(以下、単元初発・終末ワークシートという)を分析した。

【質問紙調査実施期間】

事前：令和2年10月8日(木)～10月14日(水)

事後：令和2年10月30日(金)～11月5日(木)

イ 研究協議会

検証授業の全日程終了後、授業を参観した教職員を対象に、研究協議会を実施した。

【実施日】令和2年10月29日(木)

3 検証授業

(1) 検証授業の概要

「古典B」選択クラスにおいて、「新学習指導要領」の新設科目「言語文化」を準用し次のとおり実施した。

【実施期間】令和2年10月26日(月)～10月29日(木)

【対象】湘南台高等学校 第2学年1クラス(38名)

【単元名】和歌 ～様々な現代語訳を読み比べる～

第1表 単元計画(全4時間)

時間	学習内容
1	作家等の意識の読み比べ(和歌①・②)
2・3	逐語訳の作成、意識の作成(和歌③・④)
4	クラスメイトの意識の読み比べ(和歌③・④)

(2) 題材について

第2表 使用した和歌

①	花の色はうつりにけりないたづらに わが身世にふるながめせしまに(小野小町)
②	わすらるる身をば思はず誓ひてし 人のいのちの惜しくもあるかな(右近)
③	わすれじの行末まではかたければ 今日をかぎりの命ともがな(儀同三司母)
④	もの思へば沢の螢もわが身より あくがれ出づる魂かとぞ見る(和泉式部)

百人一首にも採られている和歌①～③から、教科書掲載和歌④へと段階的に学習を進められるようにした(第2表)。また、和歌②～④を共通のテーマ(女性の恋愛に関する歌)から選定することで、当時の文化的背景等が理解しやすいように配慮した。

意識については、百人一首の解説本等の中から、出版年や訳者の職業、訳の文体・長短等ができるだけ偏らないように配慮し、田辺聖子(小説家・随筆家)、杉田圭(漫画家)、橋本治(小説家・評論家)、最果タビ(詩人)の訳を使用した。

(3) 各時間の授業内容

ア 第1時

第1時には、まず、和歌①を例に、現代語訳には逐語訳と意識があることを確認した。次に、和歌②について、作家等の意識を読み比べた(第3図)。生徒からは「意識は普段使う言葉に近くて分かりやすい」、「和歌に込められた気持ちが伝わりやすい」等の声が聞かれ、意識を通して和歌に親しむ様子が見られた。

①「誓ひ」	②「誓ひ」	逐語訳	意識
「誓ひ」	「誓ひ」	【逐語訳】 「あなたから忘れられる私自身の…」	【意識】 「あなたから忘れられる私自身の…」
「誓ひ」	「誓ひ」	【逐語訳】 「あなたが私を忘れても平気よ…」	【意識】 「あなたが私を忘れても平気よ…」
「誓ひ」	「誓ひ」	【逐語訳】 「忘れることも思わず誓ったわ…」	【意識】 「忘れることも思わず誓ったわ…」
「誓ひ」	「誓ひ」	【逐語訳】 「永遠を誓うと言いましたよね…」	【意識】 「永遠を誓うと言いましたよね…」
「誓ひ」	「誓ひ」	【逐語訳】 「誓ひ」	【意識】 「誓ひ」

第3図 第1時で使用したワークシート(概略)

イ 第2・3時

第2時には和歌③について、逐語訳と意識を作成した(第4図)。意識を作る際に工夫した点を記入することで、生徒が改めて原文と現代語とのつながりを意識

するように留意した。第3時には和歌④について、第2時と同じ活動を行った。

①「誓ひ」	②「誓ひ」	逐語訳	意識
「誓ひ」	「誓ひ」	【逐語訳】 「この歌に込められているのは、どのような気持ちか、書こう。」	【意識】 「この歌に込められているのは、どのような気持ちか、書こう。」
「誓ひ」	「誓ひ」	【逐語訳】 「『2』が現代の我々に伝わりやすいように『1』を書き換えて自分だけの『意識』を作ろう。」	【意識】 「『2』が現代の我々に伝わりやすいように『1』を書き換えて自分だけの『意識』を作ろう。」
「誓ひ」	「誓ひ」	【逐語訳】 「『4』『3』を作ったときに、どの部分をどのように工夫したのが、書こう。」	【意識】 「『4』『3』を作ったときに、どの部分をどのように工夫したのが、書こう。」
「誓ひ」	「誓ひ」	【逐語訳】 「『5』『3』について、クラスメイトからコメントをもらおう。」	【意識】 「『5』『3』について、クラスメイトからコメントをもらおう。」

第4図 第2時で使用したワークシート(概略)

【和歌③生徒の意識例】
※原文のまま。下線は、筆者(以下、同じ)。 「お前のこと忘れない」って言ってくれたよね 私はうれしかったよ でも信じれるわけじゃない あなた他の女のどこにも行ってらわよね どうせその女にも同じこと言ってるんでしょ もうわり死ぬ あなたが愛してくれた今日 死ぬたらなあ (生徒A)
【和歌④生徒の意識例】 沢山愛し合っていたはずなのに どうして私を忘れてしまったの 忘れたくても忘れられない 私の魂は螢のようにどこかに飛んでいったわ もう戻ってこない あの時の私も 全部あなたのせいよ (生徒B)

和歌③では、生徒Aのように、当時の文化である通い婚や一夫多妻制を踏まえて意識をした生徒が多かった。和歌④では、生徒Bのように、古語「あくがる」の解釈に「螢」のイメージと作者の心情とを重ねた意識が見られた。このように、生徒の意識からは、語句や文法の理解に留まらない解釈の広がりが見られた。

ウ 第4時

【逐語訳】	【意識】
【逐語訳】 「あなたから忘れられる私自身の…」	【意識】 「あなたから忘れられる私自身の…」
【逐語訳】 「あなたが私を忘れても平気よ…」	【意識】 「あなたが私を忘れても平気よ…」
【逐語訳】 「忘れることも思わず誓ったわ…」	【意識】 「忘れることも思わず誓ったわ…」
【逐語訳】 「永遠を誓うと言いましたよね…」	【意識】 「永遠を誓うと言いましたよね…」
【逐語訳】 「誓ひ」	【意識】 「誓ひ」

第5図 第4時で使用したワークシート(概略)

第4時には、第2・3時に作ったクラスメイトの意

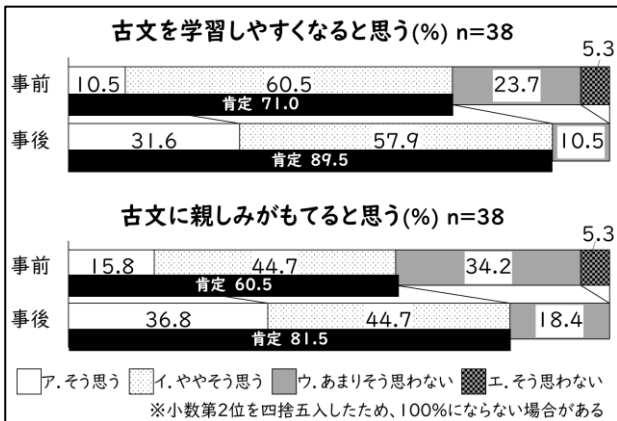
訳を読み比べた(第5図)。生徒からは「自分とは全く違う表現をしていて面白い」、「同じクラスの人がこんなに素敵な訳をするのかと驚いた」等の声が聞かれ、解釈や表現の広がり気付いた様子が見られた。

4 検証結果と考察

ここでは、2(2)で述べた2点の「期待する効果」が見られたかどうかを確認した上で、言語文化に対する関心の高まりが見られたかどうかを検証する。

(1) 「期待する効果」が見られたか

ア 古典に対する抵抗感の減少が見られたか



第6図 古典に対する抵抗感について

今回の授業を通して「古文を学習しやすくなると思う」、「古文に親しみが持てると思う」という質問に肯定的な回答をした生徒は、どちらも80%を超えている(第6図)。「現代語訳を活用する授業のイメージ」を聞いた事前質問紙調査の結果と比べても、それぞれ18.5ポイント、21.0ポイント上がっている。

したがって、今回の授業では、古典に対する抵抗感を減少させる効果が一定程度見られたと考えられる。

イ 古典の解釈の多様性への気付きが見られたか

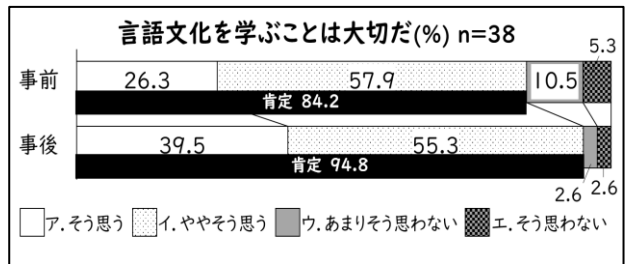
古典の解釈の多様性について、単元初発ワークシートでは記述が全く見られなかったが、単元終末ワークシートでは38人中30人(78.9%)に記述が見られた。

【多様性に関する記述例】

- ・一つの言葉から読み取る想いやニュアンスが読む人によって微妙に変わるのが面白いと思った。(生徒C)
- ・それぞれ色んな人が色んなことを感じるからこそ現代まで古文が繋がっていると思う。(生徒D)
- ・意識にすることで昔の人が何を思ってこの歌を詠んだかというのを深く考察し、十人十色・千差万別の意識を作ることができるようになったと感じた。(生徒E)

訳者による解釈・表現の多様性に気付いただけでなく、自分で意識を作る活動を通して多様な解釈・表現が生まれる過程を実際に体験できた等という記述が見られた。また、自分とクラスメイトの意識を比べて、互いの感性の違いに言及した記述も見られた。これらのことから、今回の授業では、古典の解釈の多様性を気付かせ、実感させる効果が一定程度見られたと考えられる。

(2) 言語文化に対する関心の高まりが見られたか

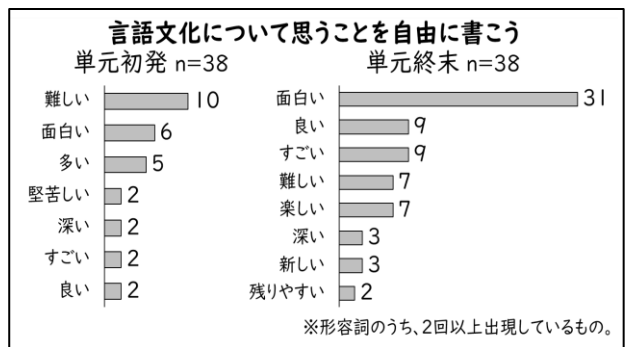


第7図 言語文化を学ぶことについて

言語文化を学ぶことは大切だと思う生徒は、事前質問紙調査に比べて10.6ポイント上がり、94.8%であった(第7図)。理由の記述からは、授業を通して文化を受け継ぐ大切さに気付いたり、古典と現代の言葉のつながりに思いを致したりした様子が見られた(第3表)。

	事前	事後
生徒F	《そう思わない》 大人になって使うと思わないから。	《ややそう思う》 言葉の文化を受け継がなければならぬから。
生徒G	《あまりそう思わない》 今の日本語と違うから。	《ややそう思う》 今の言葉の構造を理解するには、昔の言葉を理解してどのように変化していったのか分かる必要があるから。

さらに、「言語文化について思うことを書こう」というテーマで書いた単元初発・終末ワークシートについて、ユーザーローカルテキストマイニングツールを用いて形容詞を抽出し出現回数を集計した。単元初発では「難しい」が最も多かったが、単元終末では「面白い」が最も多くなり、他にも「良い」や「楽しい」等の肯定的な形容詞が増えている(第8図)。



第8図 単元初発・終末ワークシートにおける形容詞の出現回数

具体的な記述からは、授業を通して日本語の面白さに気付いたり、昔の人の感じ方・考え方に共感したりする様子が見られた(第4表)。1(2)で述べたとおり、本研究では「言語文化とは、古典と現代とのつながりを重視したものである」と捉えたが、そのような言語文化の特長に気付くことができた生徒もいた。

以上のことから、今回の授業では古典に対する抵抗感の減少と古典の解釈の多様性への気付きが見られ、これらによって言語文化への関心を高める効果が一定程度見られたものと考えられる。

第4表 単元初発・終末ワークシートの記述例

	初発	終末
生徒H	古文は日本語なのに難しく感じる。そもそもの意味が難しい。	日本語っておもしろいなと思った。現代の言葉に自分たちで言い換えてすりゃれば記憶にも残りやすいし、普通に授業やるより楽しむことができた。
生徒I	今と昔ではつながりがあると思うけれど、表現が違う気がするから、同じにすると分かりにくいような気がする。	今も昔も人々が感じる気持ちや、思い悩む理由は全く違うわけではないと気が付いた。特に恋愛の歌にある女性側の心情は、意識にすることでより身近に感じ、考えることは変わらないんだなあと思った。
生徒J	今と同じように使われている言葉が多いなとは思っていた。古典の勉強をする必要があるのかと疑問に思うてしまうことがある。	実際に自分で、自分の知識を用いて逐語訳を作り、そこからまた意識するのは、とても長い年月を昔から今に自分でつなげている気がして、今回の「言語文化」というテーマのおもしろいところだなと思った。
生徒K	昔からそのまま使われている言葉。昔の書物を読んで楽しむ、内容や作風に学ぶこと。	一つの物事を色々な角度から見ることで新しい物が生まれ、さらにそれを色々な角度から…と繰り返すことが昔と今をつなぐ橋になっていると思う。逆にもとをたどれば0から1を生み出した人がいて、昔の人がいかにすごいかが分かることも言語文化の良いところだなと思った。

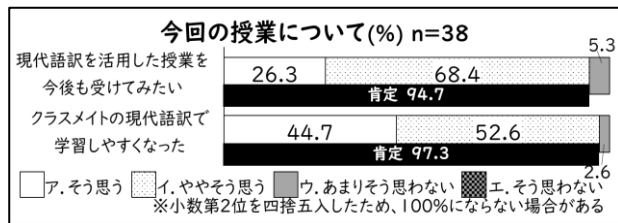
研究のまとめ

1 研究の成果

以上に述べてきたことにより、生徒の言語文化への関心を高めるための言語活動の一例として、現代語訳を読み比べる言語活動を取り入れることの有効性を示すことができたと考える。特に、答えが一つに定まらない意識を活用したことで、生徒が自分自身の感性を通して古典と向き合い、現代の自分と古典とのつながりを意識できた点が有用であったと考える。

次に、今回の検証から、今後の古典分野の授業改善につながると考えられる点をまとめる。

今回の授業についての質問では、それぞれ90%を超える生徒が肯定的な回答をしている(第9図)。



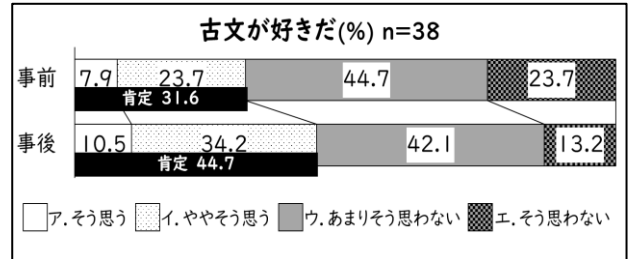
第9図 今回の授業について

【「今回の学習はどうだったか」記述例】

- 前まで古典は大っ嫌いだったが、意識という新たなことを知って大嫌いから嫌いに変わった。(生徒L)
- 印象に残るから覚えやすい！様々な考えの人が周りについてことを改めて実感した。(生徒M)
- いろんな人の考えを知れて、気付かされることが多くて嬉

しかった。(生徒N)

具体的な記述からは、意識の作成や読み比べを通して他者の考えを知ること、自分の考えが広がった点の評価する意見が散見された。また、「古文が好きだ」という質問に肯定的な回答をした生徒は、事前質問紙調査から13.1ポイント高くなり、44.7%になった(第10図)。今回の授業を通して、古文に肯定的な生徒が増えたことは、授業改善につながる成果であると考えられる。



第10図 古文が好きかどうかについて

さらに、今回の検証授業では、筆者の他に2名の教員が同じ教材・指導案を使って授業を行った。実際に授業を行った教員からは次のような意見が出された。

【研究協議会における教員の意見①】

- 生徒からこんな答えが出るんだ、生徒には表現力がこんなにあるんだと思った。
- 今回の実践を通して、生徒が活発に動く様子や、素晴らしい意見や表現をすることに気付いた。生徒の意識が変わったのが分かった。自分自身にとっても、良い機会だった。

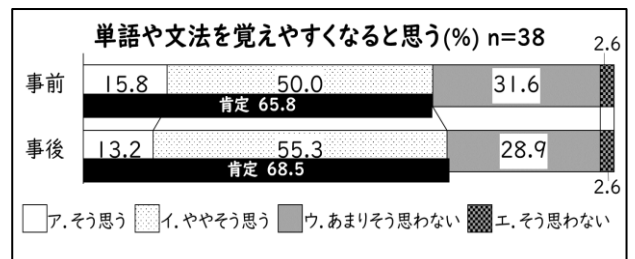
筆者一人の実践に留まらず、他教員とともに実践できたことも、今後の授業改善につながる成果であると考えられる。

以上により、本研究の目的である「古典分野の授業改善に資するために、生徒の言語文化への関心を高めるための言語活動を実践し、その有効性を検証する」ということは、一定程度達成できたものと考えられる。

2 研究の課題と今後の展望

(1) 古文単語や文法事項の扱いについて

今回の検証授業では、古文単語や文法事項についてはワークシートに記載し、生徒自身に確認させるに留めた。そのため、「単語や文法を覚えやすくなると思う」に対する回答について、授業の前・後で大きな変化は見られなかった(第11図)。



第11図 古文単語や文法事項について

研究協議会では次のような意見が出された。

【研究協議会における教員の意見②】

- 今後このような授業が求められるのはよく分かるが、大学

受験を考えると文法や単語をやらないわけにもいかない。
 ・文法事項が分かっていると読みの理解が深まる。文法嫌いをなくすにはどうすればいいか。

このような課題に対しては、今回の検証授業の内容に加えて、予習課題として生徒に調べさせたり、逐語訳・意識の作成の際にクラス全体で意味や用法を確認する時間を確保したりすることが考えられる。

前述のとおり、生徒は意識の活用について肯定的である。意識の読み比べを通して、内容を理解してから知識を身に付けるという、従来とは逆転した授業展開を試みることも、古文単語や文法事項を学ぶ動機付けの一手段になり得る。また、意識を作るためにはまず逐語訳を作る必要があり、逐語訳を作るためには古文単語や文法事項の知識が必要である。このことを生徒に気付かせるような工夫をすることが重要である。

(2) 他の題材への応用について

今回の検証授業では和歌を題材とした。和歌は個々の作品が短いため、複数の意識の読み比べが容易であり、今回の言語活動に適した題材であった。他の題材に応用する場合には、単元の導入に使ったり、作品の一部分を抜粋して使ったりすることもできる。また、授業を逐語訳の作成で終わらせず、作品を読み味わうことを重視するという点では、古文に限らず漢文でも同様の言語活動を設定できると考える。

(3) 評価について

今回の検証授業では、次のとおり評価規準を設定した(第5表)。このうち、「主体的に学習に取り組む態度」については、単元初発・終末ワークシートの記述の変容によって評価した。この観点は、本研究のテーマである関心を高めることとも密接な関わりがある。今後は、授業形式の改善と同時に評価方法についても検討を加えていく必要がある。

第5表 今回の検証授業における評価規準

評価規準	知識・技能	思考・判断・表現(読むこと)	主体的に学習に取り組む態度
	元になった古文の言葉と現代語訳で用いられている言葉とのつながりについて理解している。	様々な現代語訳に表れている多様な解釈・表現を踏まえ、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。	様々な現代語訳に表れている多様な解釈・表現を踏まえ、我が国の言語文化について自分の考えをもとうとしている。
指導事項	知識及び技能 (2) エ	思考力, 判断力, 表現力等 B 読むこと(1) オ	

以上の課題を踏まえ、今後も生徒の言語文化への関心を高めるための言語活動を考案・実践していきたい。

おわりに

本研究では、言語文化への関心を高める言語活動の実践例の一つとして、多様な現代語訳の読み比べ活動を示した。「新学習指導要領」の実施に向けて、今後

も授業改善に取り組んでいく所存である。

最後に、所属校の生徒・教職員をはじめ、本研究に御協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

引用文献

- 小学館国語辞典編集部 2006 『精選版日本国語大辞典』小学館
 文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説国語編』東洋館出版社
 浅田孝紀 1995 「『言語抵抗』の概念規定—古典教育のための理論的基礎として—」(人文科教育学会『人文科教育研究』第22号)p. 93

参考文献

- 株式会社ユーザーローカル AIテキストマイニング
<https://textmining.userlocal.jp/>(2020年11月18日取得)
 国立教育政策研究所 2015a 「平成27年度学習指導要領実施状況調査 教科・科目等別分析と改善点(高等学校 国語科 国語総合)」
 国立教育政策研究所 2015b 「平成27年度学習指導要領実施状況調査 教科・科目等別分析と改善点(高等学校 数学科 数学科 I)」 p. 11
 国立教育政策研究所 2015c 「平成27年度学習指導要領実施状況調査 教科・科目等別分析と改善点(高等学校 外国語科 コミュニケーション英語 I)」 p. 10
 石原直哉 2011 「高等学校 現代語訳で読み味わう『源氏物語』」(明治書院『日本語学』4月号)pp. 48-65
 井内健太 2019 「高等学校新学習指導要領における古典教育について—教材としての現代語訳『源氏物語』—」(金沢学院大学『金沢学院大学紀要』第17号)pp. 60-65
 清川あさみ・最果タヒ 2017 『千年後の百人一首』リトルモア
 澤田浩文 2017 「現代語訳がスタートとなる古典授業—古典作品の比較を通して作品を深く読む—」(長野県国語国文学会事務局『研究紀要』第12号)pp. 124-136
 杉田圭 2010 『超訳百人一首うた恋い。』KADOKAWA
 田辺聖子 1991 『田辺聖子の小倉百人一首』KADOKAWA
 中村栄江 2011 「言語文化への関心を高める中学校国語(古典)の授業づくり—『読み比べ』による指導の工夫—」(神奈川県立総合教育センター『長期研究員研究報告』第9集)pp. 1-6
 橋本治 2016 『百人一首がよくわかる』講談社